慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンにおけるヒポコンドリーと政治
Sub Title	Hypochondrie und Politik bei Johann Georg Zimmermann
Author	斎藤, 太郎(Saito, Taro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.60(353)- 82(331)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンにおけるヒポコンドリーと政治

斎藤　太郎

1

『詩と真実』第三部十五章でゲーテは，1775年9月スイス人医師ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンが一人娘を伴ってフランクフルトの自宅を訪れたおりの様子を物語っている(1)。ゲーテはその中で，「社交上手の熟練医師」として高い名声を博しているのみならず，当時すでに著述家としても知名度を高めつつあったツィンマーマンの人物に言及し，「彼の話は多方面にわたり，きわめて教えられるところが多」く，「彼と交際することほど望ましいことはなかった」，と好意的に評している。だが，世事に長け話題豊富な社交人という人物像を呈示したのち，ゲーテはツィンマーマンに対するイメージを暗転させるようなエピソードを紹介する。それによれば，ツィンマーマンの娘は父親の前では言葉少なでさほどの印象を与えなかったが，父が一足先にゲーテ宅を辞したのち，ゲーテの母に対し涙ながらに父の暴君ぶりを訴え，自分を引き取ってもらえないかと嘆願したというのである。

> 彼女は熱情こめた言葉でこう言った。父のもとへ帰らずにすむなら，下女としてでも，奴隷としてでも，一生のあいだこの家にとどまりたい。父の厳しくてわがままなことといったら，他の人にはとてもわからないだろう。自分の兄はこうした仕打ちのために，気が狂ってしまった。自分がこの苦しみを長いあいだ仕方ないと耐えてきたのは，どこの家庭も同じようなもので，たいした違いはないだろう思っ

ていたためだった。ところが，これほど愛情に満ち，快活で束縛のない待遇を知ってしまったいまとなっては，自分の境遇は正真正銘の地獄に変わってしまった。

ゲーテはツィンマーマンが自分の子供に対してとった行為を「持続的な精神的殺人行為」ときびしく批判している。ゲーテによるこのショッキングな記述は，しかしながら必ずしも事実に沿うものとは言えない。ツィンマーマンの生涯に関する最も詳細で信頼の置ける研究を残したR. イッシャーは，ツィンマーマンの息子の精神病発病は1777年になってからのことであり，ツィンマーマン訪問直後のゲーテが書簡においておこなっている人物評が極めて好意的なものに終始していることなどを傍証として挙げ，上のエピソードには相当の詩的粉飾が施されていることを明らかにしている(2)。もっとも，『詩と真実』を題目に掲げた作品に関して，ゲーテが語る内容に事実面での瑕疵をあげつらうのは不当なことかも知れない。ともあれ，事実の再現という点でゲーテの記述に問題があるとしても，重要なのはゲーテがツィンマーマンをこのように見ていたということであろう。そして歴史的事実からの逸脱が多々あるとはいえ，ゲーテの眼はさすがにツィンマーマンのなかにある極端に対照的な二つの面，そしてこの両極端の間を激しく振幅する彼の「真実」を見逃していない。ゲーテが描くツィンマーマンは「激しく真っ直ぐな性質」の持ち主でありながら，社交上は「外面と態度を完全に自制」しているだけに，一層「抑えがたい内面の性格」が私的な交わりや著作のなかで「堰を切ったように」噴出せざるをえない人間であり，また「他人が自分の業績を認めて正当に評価してくれること」を求める自己顕示欲を示しながら，「自分が不正なものと認め，考えたもの」すべてに対し「激怒せんばかりに苛立って」攻撃を加え，「息も絶え絶えになるまで暴れまわ」る論争家でもある。それでは，今日も癌研究者に与えられる《ヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマン賞》に名を残す重要な医学者であると同時に，「偉大な功績をなしとげながらも，内面的にはすこしも楽しむところが」なく，「外見上は名声，地位，財産を得

ていたにもかかわらず，じつに悲惨な生涯を送った」とゲーテが評するツィンマーマンとは一体何者だったのだろうか。

2

1728年12月8日にドイツ語圏スイスの小都市ブルックに生を受けたヨーハン・ゲオルク・ツィンマーマンの学者としてのキャリアは，同時代のスイスが生んだ大学者ハラーを抜きには考えられない。14歳まで家庭教師による教育を受けたのち，1742年からベルンのアカデミーで哲学，歴史，雄弁術，ギリシャ語を学んだツィンマーマンは，1747年にハラーが教鞭をとる新進気鋭のゲッティンゲン大学に赴き医学の学業に就く。ハラーは同郷から推薦状を携えてやってきたこの若者を自宅に下宿させ，公私ともに手厚い指導をおこなった。ツィンマーマンはハラーの期待に応え，文字通り寝食を削って学業に打ち込んだが，当時彼が家族に書き送った書簡にはすでに，同時代人が等しく認めた彼の激しい名誉欲の萌芽が認められる。「私はこの地で，死後も生命を保ちたいという願望を持った人間の生活を送っています。」(3) ハラーがツィンマーマンの才能をどれほど嘱望していたかは，ほどなく筋肉組織と神経繊維の被刺激性について自分がおこなっていた研究に加わらせたことにも見てとることができる。ツィンマーマンは蛙や犬や鳩の生体解剖を主とした数多くの生理学的実験に参画し，1751年にはハラーのもとで『被刺激性に関する生理学的論考』を書き上げて博士号を取得する。これを受けハラーは同一テーマについての講演をおこない，そのなかでこの論文を援用するという形でツィンマーマンの医学者としてのデビューに多大な援助をおこなった。

スイスの田舎町の狭隘な世界を脱し，ドイツ一流の大学町ゲッティンゲンで華々しい成果とともに学業を終えた彼は，さらに「広い世界」を知るためにオランダ，フランスへの教養旅行を試みるが目的半ばで旅費が底をつき，弟子の窮乏を知ったハラーの斡旋によりしばらくゲッティンゲンで家庭教師の職について糊口をしのいだ。ハラーは才能豊かな弟子に大学でのポストを考えていたようだが，医師としての実践活動を望むツィンマー

マンは1752年ベルンへ戻り開業医としてのスタートを切った。ベルン時代の二年間に医師としての評価を高めていったツィンマーマンは，1752年またしてもハラーの推薦により，故郷ブルックの市雇用医師のポストを手にする。以後14年間にわたって自分が幼少期を過ごしたこの小都市が彼の活動の場となった。単に診療活動にとどまらぬ多様な業務を課せられながらも，市の名士の一員に迎えられたいという願望を原動力として与えられた使命の遂行に全力を尽くしたが，ブルックが所属していたベルン州政府当局者にとって所詮「よそ者 Ausburger」にすぎぬ一医師には，その自尊心に見合うだけの社会的地位は望むべくもなかった。赴任後間もないハラー宛の書簡ですでに，同地のお偉方は医療費の支払いは一般人と変わらぬくせに，医師のことは自分の靴職人と変わらぬ扱いをしてもよいと思っている，と苦情を申し立てているが(4)，冷淡な州当局者に対する不満が高じると共に，「寂寥が支配し刺戟に乏しく，精神の炎を消してしまうこの地」に対する耐え難い思いは日増しに募っていった。政治の表舞台における活動の機会が与えられぬ現実を知ったツィンマーマンは，自己実現の道を別の領域に求めはじめる。こうして著述をおこなう「哲学的医師」ツィンマーマンが誕生する。

エルンスト・プラートナーは1772年，『医師と哲学者のための人間学』のなかで，人間という現象を新たなアプローチによって探究する必要を主張し，「身体と心の関係と相互作用そして両者の結びつきを全体として考察する」学問として「人間学 Anthropologie」を位置づけている(5)。彼は続けて，人間を心身の統合体と見るならば，「人間に関する学問」である「哲学」はおのずと「医学」を内包するものでなければならないとして「哲学的医師」の登場を要請してこう言う。「人間は身体のみからなる存在でもなければ心からのみなる存在でもない。人間とは両者の調和したものであるから，私の思うに，医師が身体だけに専念することは許されないし，モラリストが心だけに限定することも許されないのだ。」(6) 事実，18世紀半ばに「全人間 der ganze Mensch」を学問対象とする「人間学」を隆盛へと導いたのは一連の「哲学的医師」たちだった。彼らは解剖学や生

理学の研究成果，治療活動から得られた知見，自己観察など，つまりは抽象的な思弁によってではなく，「経験」を基礎として人間のありようを追求した。その根底にあったのは身体と心の相互作用という現象だった。デカルト的心身二元論は身体と精神を全く別種の実体と位置づけることにより，一種の「機械」としての身体を分析的に探究する視点を用意し，それによって近代医学の発展に寄与したが，他方で身体と心の相互作用は原理的に排除されざるをえなかった。だが，診療行為のなかで心身の相互作用という現象に日常的に接している医師たちは，自分たちの経験を根拠づける新たな「学際的」研究 —— J. A. ウンツァーの言葉を借りれば「哲学と医学の中間に位置すべき」「中間的学問」—— の必要を認識してこれを要請した(7)。ツィンマーマンもまた，若き日に接したヴォルフ哲学の抽象的・思弁的内容に激しい拒絶反応を見せて(8)，演繹的合理主義の観点から人間を論じる哲学的方法を退け，心身の両面から人間の全体像に迫る必要性を説いている。

> 医師それ自身は身体を通じて心に働きかけるのみである。しかし医師は同時に哲学者として，心を通じて非常に多くの良いものを身体のなかに生み出すことができる。(…) メランコリーを病む人間に対してどれほど慰めとなる良い忠告を与えようともそれは無駄というものであって，もしもメランコリーの原因が身体に根ざすものであれば，その人にとって人間のいかなる叡智といえど無意味なのである。だが，不快な思いや憂悶や悲しみや不安の原因が心の中にある場合，身体を治療する薬では十分な効果を上げられない。なぜならこれら不快な感情は，その原因が心の中から除去されるまでびくともせずに進行するからである。だが，身体と心の両方に原因がある場合には，双方に対し同時に意を用いなければならない(9)。

プラートナーは，医師が哲学に従事することを「教養ある医師の暇つぶし」と見る向きに異を唱えて「哲学者であるがゆえに偉大な存在となった人々」を想起するよう促し，その例としてベアハーフェン，ハラー，ティソと並んでツィンマーマンの名を挙げているが，事実ツィンマーマンは

「観察する理性」が時代のスローガンとなった18世紀後半を代表する著述家として同時代人に受け入れられていったのである。

ツィンマーマンは師であり庇護者であるハラーに捧げた『フォン・ハラー氏の生涯』(1755年)[10]を皮切りに，次々に著作を発表することによってドイツ文化圏の周縁からの脱出を試みた。翌1756年には後に彼のライフワークとなるテーマを初めて扱った『孤独に関する考察』，1758年にはコスモポリタン的立場から共和制を最高の政治形態と主張する「通俗哲学的」著作『国民の誇りについて』を世に問う。以降，『医術における経験について』(全2巻，1763/64年)，『赤痢について』(1767年) と精力的に著述活動を展開してゆく一方で，ローザンヌの高名な医師ティソを始め，ボードマー，ブライティンガー，ヴィーラント，ユーリエ・フォン・ボンディ，ラファーター，ゲスナー，イーゼリーン，ズルツァー，アプト等国内外の著名な文学者・学者と幅広く書簡のやりとりを開始する。なかでもベルリン後期啓蒙主義の中心人物フリードリヒ・ニコライとは積極的な意見の交換をおこない，1768年以降その求めに応じてニコライが主宰する『ドイツ文献総覧 Allgemeine deutsche Bibliothek』への寄稿をおこなうほか，ニコライを通じて尊敬するモーゼス・メンデルスゾーンやレッシングとも間接的な交流を結んだ。これによってツィンマーマンは多岐にわたる人脈をもつコスモポリタン的啓蒙思想家として世の認知を受けることになった。

ドイツの論壇に着々と地歩を築いていくかたわらで，著作の中で当時「流行の」病ヒポコンドリーやメランコリーに対する精神身体学的な説明や対処法を呈示したツィンマーマンの声望が高まるとともに，医師としての活動範囲も急速に拡大し，国内外の貴族たちが彼の診察を希望するようになっていった。日々の生活においては相変わらず地方医師の屈辱的な処遇に甘んじざるをえなかったツィンマーマンだが，1768年にはこの点でも転機が訪れた。同年，英国王ジョージ三世の侍医のポストが前任者の死によって空席となったさい，ハラーの紹介により招聘を受けた友人ティソがこれを断る代わりにツィンマーマンを推薦したのである。これにより，ツ

ィンマーマンはようやく医師としての自尊心を満たすに足る地位を得ることになった。以後死に至るまで同地が彼の活動拠点となり，「大英帝国宮廷医」の肩書きが彼の著作の表紙を誇らしげに飾ることになった。

3

当初ハノーファーでのツィンマーマンは，期待が大きかっただけ侍医としての自負心とこれに見合わぬ社会的名誉との格差に鬱々とした日々を送った。友人に宛てた書簡で述べている不満は基本的にブルック時代と変わっていない。「婦人方というものは，一度でもジョージ二世と一緒にコーヒーを飲んだことがあると，私が王の命に従うように自分たちの命にも従うべきだと信じて疑わないのです。」[11] こうした状況に加えて1770年には唯一の理解者であった妻の死という打撃が彼を襲う。だが，「書くこと」が一種の自己治療の意味をもっていた彼にとって，精神の鬱屈はそれだけいっそう旺盛な執筆活動の原動力となった。ボイエの『ドイツ博物館 Deutsches Museum』やヴィーラントの『ドイツ・メルクール Der Teutsche Merkur』，また特に『ハノーファー雑報 Hannöversches Magazin』には彼の論文が数多く掲載された。こうした活動のなかにあって，友人ラファーターの観相学を世に知らしめるために労を惜しまなかったことは特筆されよう。彼は観相学という新しい学問成立の場面に立ち会ったのみならず，自らシルエットや銅版画などの資料を提供することによってラファーターを励まし続けた[12]。ラファーターはこれに対し，主著『観相学的断章』のなかでツィンマーマン自身を分析対象とし，注目すべき人格描写を行っている。

> この人格はなんと極端な対照からなっていることだろう！　この人格はなんと容易に一面的で，恐ろしく間違った判定へと人を迷わせることだろう！　—（…）死のような冷たさとすべてを焼き尽くす稲妻のような炎—これがただ一つの魂，一つの顔に共存しているのだ。朗らかな春の日と荒れ狂う雷雨とのめまぐるしい交替。鋼鉄のごとき厳格さとこの上なく細やかな感情，剛胆と臆病，英雄もどきの厚顔さと

礼儀正しい腰の低さ—表向きの虚栄心と真の謙虚さ，人を刺す諷刺と穏やかで温かな心のやさしさ，極度の神経過敏とねばり強い忍耐心。(…) 倦くことなき忠誠心を示す一方で，本人を知らぬ者には侮辱的としか思えぬ冷徹さを見せるが，この冷徹が今度は瞬時にして熱誠と熱愛へと変わる。一瞬完全に自制心を失うかと思えば，次には完璧に自分を抑制してみせる。国王のごとき権力をもつ医師でありながら，その目はいとも柔和で優しい涙に溶けてしまう。そうかと思えば，こんどは稲妻のまなざしで人を貫き通す。(…) 何人をも退屈させぬ教養を積みながら，当人はしばしば死ぬほどの不安をもって退屈に堪えるのである[13]。

ラファーターの筆は，同時代人が等しく観察した二つの極の間を揺れ動く彼の本質を見事に描ききっている。まさにこの二面性ゆえにツィンマーマンはという人間は —— 表面的にはエレガントな立ち居振る舞いと豊富な話題，巧みな話術によって宮廷の女性たちの人気を集めながらも ——，真の理解者に恵まれぬと同時に多くの敵を作ったのである。ハノーファー時代に交流を結んだボイエは「ごく身近に知ることなしには評価することも愛することもできぬ人間」[14]と彼を評し，ティソの伝えるところによれば彼の妻は死に際して「かわいそうなツィンマーマン。私が死んだら誰があなたのことを理解してくれるでしょう」との言葉を残したという[15]。ツィンマーマンのこうした不幸な人格に関して伝記作者が揃って言及するのが彼のヒポコンドリー気質である。彼はこの気質を「神経が弱く，後に精神病者となった」母親から受け継いだと伝えられるが[16]，医師ツィンマーマンがヒポコンドリーの分析および対処法において高い評価を受けたのも，一つには彼自身の内面に巣くうこの「神経の病」が格好の観察対象であったことに帰せられるだろう。だが，19世紀の医師フォイスタースレーベンが指摘するように，身心の動きを細大漏らさず観察する医師の視線そのものがヒポコンドリーを悪化させる要因となったことも推測される。「われわれ医師に特有のヒポコンドリーというものがある。なぜなら，ヒポコンドリーがおのれの身体の苦しみを拡大して見せる顕微鏡であるとするなら，われわれはこの顕微鏡をわれわれの学問自体のなかに

持っているからだ。」[17]

ツィンマーマンの最初の伝記作者となったティソは同じ医師の立場から彼の友人が抱えていた問題点を指摘している。「二三の出来事に際してその性格の力からは考えられぬような一種の臆病さを彼に与えたのは彼の神経だった。人生には些細な不愉快はつきもので，人はこれに堪えるしかないのだが，神経の状態ゆえに彼はそうした事どもに対しひどく過敏だった。」[18] 彼のヒポコンドリーが招いた「神経過敏」は患者との交流や社交生活においては「社交上の配慮から」極力抑えられていたが，その抑圧が強ければ強いほど，彼にとって内面を自由に披瀝しうる著述の分野での激しい攻撃性となって現れた。「書斎に身を置くと，身内の力，若々しい熱情，愚かしい事どもに対する嫌悪感にすっかり圧倒されてしまった。いったんそうなった彼は仮借というものを知らなかった。」[19] 事実後半生におけるツィンマーマンは，孤独で平穏な生活を希求しながらもそれと裏腹な自己顕示欲に突き動かされて自ら数々の苛烈な論争に身を投じ，それによって破滅の淵に沈んでいった観が否めないのである。

4

1771年7月，ツィンマーマンはティソの忠告に従い，長年彼を苦しめたヘルニアの手術のためベルリンを訪れた[20]。すでにドイツで最も知名度の高い医師に数えられていた彼の手術はプロイセンの王都に大きなセンセーションを巻き起こした[21]。彼は病後の療養のため同年11月までベルリンに滞在するが，この期間に1765年以来書簡を通じて交流関係にあったニコライをはじめ，ズルツァー，ラムラー，メンデルスゾーン，レッシング等ベルリンの代表的啓蒙主義者と直接相識る機会を得たばかりか，プロイセン王フリードリヒ二世に謁見を許されるという幸運にも恵まれた。ハノーファーに帰還したツィンマーマンは，病が癒えると再び多忙な日常に戻ったが，医師としての盛名はますます高まり，ブラウンシュヴァイク公をはじめとする数多くの君主たちから診察を依頼されるようになっていった。

こうした状況下でツィンマーマンは畢生の大著『孤独論』を完成させる[22]。カントの「啓蒙とは何か？」と同年の1784年から85年にかけて出版され，全四巻約二千頁にわたるこの著作は，いわば彼の人間学的知見の集成であり，「観察をおこなう医師と病人を一身に具現した」[23]ツィンマーマンの特徴が最も明確にあらわれた作品でもある。ツィンマーマンの著作の多くは人生の危機的局面の中から生まれたという性格を持つが，『孤独論』もその例に漏れない。1777年には一人息子の精神病が発病する。彼自身の名声の高まりと共に関係が冷却していったとはいえ，彼の導き手であり父親像の体現者でもあったハラーも同年に没している。79年にはズルツァーの死によって最も心を許した友を失い，81年には娘の死去に加え，宮廷における彼の理解者デーリング顧問官夫人がハノーファーを去るという二重の打撃が彼を襲う。デーリング夫人に献じられた序文のなかで彼は「孤独についてのこの書物は，憂愁のさなかにある私の勇気を鼓舞し，(…) 胸を締め付ける思いから私の魂を解放してくれることになるでしょう」(第1巻 XIII 頁) と述べ，一連の不幸によって文字通り「孤独」のただなかに投げ込まれた自分にとって「書くこと」が自己治療の意味を持つことを明確に表明している。また同時に，「自分の文体だけでなく自分の書物全体が自分自身に能う限り似ることを」望む彼の言葉通り，この著作は彼の二面的人格を構造と内容の両面で正確に反映したものとなっている。

「孤独とは，魂が自分自身の想念に身を委ねている状態である」という定義を根本に据えて，ツィンマーマンは18世紀という「社交の世紀」における孤独の意味を社交と孤独の弁証法的関係において描き出そうとしている。彼によれば人間は社交生活を営むよう作られているが，しかし人間の本源的欲求は人を孤独へと導いてやまない（第4巻119頁)。これは人間が本来的に孤独にも社会生活にも安住を許されないことを意味する。彼によればそれゆえ，「社交と孤独を共に享受するため」には「交互に両者に対して倦む」ことが求められる（第4巻293頁)。つまり「われわれは孤独に飽きれば交際によって活力を取り戻」さねばならず，他方「世の交わりに

疲れたら，孤独以外にわれわれを幸福にするものはない」のである（第1巻49頁）。彼の論理はすなわち —— 人間は孤独を必要とする。しかし絶対的孤独は人間が社会的存在であるがゆえ有害である。したがって人間は社会の中に身を置かねばならない。しかし社会には無数の危険が人間を待ちかまえている。したがって人間は孤独を必要とする —— という自己同着的なものである[24]。医師ツィンマーマンがこの問題に対して呈示する処方はつまるところ，人間は孤独と社交の適度な関係を見いだすべきである，という至極常識的なものにすぎない。だが，彼がここで図らずも描き出しているのは，孤独においても社会生活においてもつねに自己疎外の状況に置かれているため，孤独と社会の間を永遠に振幅し続けなければならず，いわば孤独と社会の狭間で引き裂かれている人間存在（それはとりもなおさずツィンマーマン自身の謂でもある）である。ツィンマーマンはこの永遠の循環論法に導かれるように，膨大な資料をもとに孤独の有用性と有害性を無数の実例に即して描写してゆく。形式的には全12章からなる秩序だった構成を取っているこの著作だが[25]，教会史研究や症例研究や自己観察の成果をないまぜにしたツィンマーマンの記述はしばしば挿話や逸話といった細部への執着に傾き，結果としてきわめて錯綜した印象を与えずにいない。これに加え，孤独と社交の間の激しい往還を誰よりも深く体験しているツィンマーマンの筆は，孤独に内在する明暗のコントラストにきわめて強い調子を与えている。『ドイツ文献総覧』の書評は，この著作が「理論的考察や単なる理性の演繹」によらず，「観察と経験」を基盤としていることを歓迎し，「さまざまな地域のあらゆる階層にわたる人間の内奥まで見通す」経験を持った医師が「細心の注意をもって人類が残した古今の記録」を用いた『孤独論』を「万人が理解できる，人生に有用な」書物と賞賛しているが[26]，その反面，孤独の有害性を論じた第二巻のみを読んだ読者は，その徹底した批判ぶりに「ツィンマーマン氏の意図は孤独を弾劾することにあると思ってしまうだろう」と認めている[27]。

実際，ツィンマーマンの記述が最も熱を帯びているのは，「間違った孤独」を批判する箇所であるといえる。ここで彼は18世紀啓蒙主義者たちに

よる妄信（Schwärmerei）批判の系譜に立ちながら，孤独が想像力に及ぼす危険性を古今の実例を引いて指摘している。自他共に認めるヒポコンドリー気質の彼にとってこの作業は，自己の内部に存在する「理性にとっての他者」を認識し排除するという切実な意味合いを持っていた。ツィンマーマンは精神状態に及ぼす身体的条件の影響という「哲学的医師」の視点から，「身体がわれわれの思考法の第一原因であることは非常に多い」ことを前提とした上で，「エジプト，シリア，メソポタミアの孤独者たちの魂の黒い飛翔はその大半が下半身に発している」と分析する（第1巻55頁）。東方の孤独者たちが妄信に溺れてしまったさらなる要因として気候が及ぼす影響を挙げている。エジプトの隠棲者の場合，「彼らの脳は，ひとつは過剰な太陽熱，ひとつは少なすぎる食事，ひとつは頻繁な覚醒のため，いわば完全に焼けこげてしまっているのだが，自分では現世的な富や欲望や安寧を軽蔑し女犯を避けることによって，無垢で聖なる生活を送っていると確信しているのだ。」（第1巻302頁）このような調子でツィンマーマンは「健全な理性を尺度に」[28]初期キリスト教の隠棲者や神秘主義者に対しどぎつい表現で攻撃を続けるのである。

> オリエント人特有のメランコリー，空疎な些事への偏愛，孤独において現れがちな頑迷さ，修道僧の場合非常にしばしばこの頑迷さに伴って見られる恥ずべき無知，修道院において恐ろしく伝染性の強い無数の妄信，そしてそこから生まれる黒い胆汁に満ちた狂気—これらが一体となっていとも血なまぐさい猛威をふるったため，キリスト教の教会史はかくもおぞましい歴史を刻むことになり，オリエントの荒野であれほど賞賛の的となった平和な修道院は悪魔の宿となったのである。（第2巻338頁）

そこかしこに見られるこうした表現は，例えばヴィーラントのような人々の眉を顰めさせたものの，『孤独論』は非常な反響を呼び，ツィンマーマンの手になる最も有名な著作となったばかりか，18世紀の散文作品中最も読まれたものの一つとなった。1791年にはJ. B. メルシェによる仏訳

が出版され，これを底本として英訳（1797/99年）やオランダ語訳がなされた。1789年にはイタリア語，1791年にはロシア語訳が出版されていることをみても，この著作がすでにツィンマーマン生前からいかにポピュラーであったかがうかがわれよう。だが，なかでもツィンマーマンを喜ばせたのは，啓蒙専制君主の一人であるエカチェリーナ二世にその成果を認められたことだった。『孤独論』第四巻序文において彼は自負心も露わに，ロシアの女帝が自分のもとに使者を派遣し，「大英帝国宮廷顧問官にして侍医なるツィンマーマン氏へ。孤独に関する書物によって人類に与えた数々の素晴らしい処方に感謝を込めて」と記した書簡と共に指輪とメダルを贈った事実を伝えている。エカチェリーナ二世はこれにとどまらず彼を侍医として招聘しようと試みるが，ツィンマーマンは老齢と病気を理由にこの名誉ある申し出を辞退する。しかし，その代わりに有能な同僚数名をロシア宮廷に推薦した功によって彼は1786年「聖ウラジミール騎士団」の一員に列せられる。これにより，スイスの片田舎から勤勉のみを手段として「大きな世界」へと進出し，社会的名声をつねに追い求めた彼はついに念願の貴族身分を手中にし，以後彼の著作の表紙は「騎士フォン・ツィンマーマン」という肩書きが麗々しく飾ることになった。

ツィンマーマンの名声はさらに1786年，病の床についていた老齢のプロイセン王フリードリヒ二世が彼の診療を希望してポツダムに招聘したことによって絶頂に達した。17日間にわたる治療にもかかわらず結局王を死の床から救うには至らなかったが，ツィンマーマンにとって若き日から「玉座の哲人」として偶像視していたフリードリヒから当代随一の医師と認知され，これと親しく言葉を交わすことができたという事実は，年齢と共に肥大しつつあった自己顕示欲と名誉欲を満たして余りある出来事だった。しかし，彼を得意の絶頂に導いたフリードリヒ二世との交流が，同時に彼の名声を失墜させる大きな転機となってしまうのである。

5

ツィンマーマンの生涯を概観すると，社会的地位の向上にともなって接

する患者たちの社会階層が上がっていくにつれて政治思想的にも大きな変化が生じていることが見てとれる。ブルック時代の彼がルソーの影響のもと，コスモポリタン的発想に立って民主的共和制を最高の政体と考え，貴族主義者にあからさまな敵意を見せていたのに対し，「徐々に彼の中に変化が生じた結果，彼は民主制を完全に否定するとともに，貴族制に一定の理解を示しながらも，王制を最高の国家形態と見なす」[29] ようになった。かつて共和主義的な志操を持った「自由なスイス人」であったツィンマーマンはヨーロッパを代表する君主との接触を通じて筋金入りの王党派への変身を遂げるのである。

ツィンマーマン自身の言によれば1787年10月のある日，フリードリヒ大王およびその最後の日々に王が自分と交わした対話についての本を書こうという考えが「稲妻のように閃い」た。この「彼のおそらく生涯で最も不幸な決断」[30]に基づいて1788年に『フリードリヒ大王，および私と死を前にした彼との対話について』[31]を発表したことによってツィンマーマンは以後死に至るまで，かつて自分がその一員であった啓蒙主義陣営全体を敵に回した激しい論争に巻き込まれることになった。もっとも，上に述べたような政治的志操の変化にもかかわらず1780年代半ばまでツィンマーマンは啓蒙主義者たちの高い評価を受ける存在だった。とりわけ同時期，ニコライ，ゲーディケ，ビースターを中心とするベルリン啓蒙主義者たちは，ローマ・カトリック教会がイエズス会士を用いて中世の暗黒時代の再来を画策しているとする「隠れカトリック・キャンペーン」を展開していただけに[32]，ツィンマーマンが孤独に関する一連の著作のなかで神秘主義者やカトリックの修道僧を「妄信家」として激しく攻撃したことを非常な好意をもって受けとめていた。ツィンマーマンはF. ゲーディケとJ. E. ビースターの『ベルリン雑報 Berlinische Monatsschrift』に論考を寄せているし，ニコライとはブルック時代以来書簡を交わし続けるなど，良好な関係は保たれているように見えていた。ニコライはしたがってツィンマーマンの新しい出版計画を知ると直ちに書簡を送って期待のほどを述べている。「国王についてのあなたのご著書には待ちきれぬ思いです。私にとっ

ても誰にとっても必ずや興味深い読書体験となるでしょう」[33]だが，まもなく当の書物を手に入れたニコライは，「興味深い読書体験」への期待がまったく予想外の形で果たされたことを知るのである。

ツィンマーマンの並外れた名誉欲を知るニコライであれば，ツィンマーマンがポツダムでの体験を歴史的大事件のごとくに描写するだろうことは半ば予想されたことだったが，予想を超えていたのは，叙述の中心に置かれたのがフリードリヒ二世ではなく，（ヒッペルが嘲笑的に呼ぶところの[34]）「ツィンマーマン一世」だったことである。すでに副題が「彼と私との対話」ではなく「私と彼との対話」であることからも伺えるように，この著作は全体を通して著者の独善と肥大した自尊心の羅列に終始している。「さて，たぶん世に知らぬ者とてなかろうが，この偉大な王が ―― この私をその許に呼んだのである！　世界中の医師のなかで，これほどの栄誉に浴した者はあるまい」[35]といった言辞がそこかしこにちりばめられたこの書物は，著者の強烈な自己顕示欲が生みだした意図せぬ滑稽さもあいまって格好の諷刺や嘲笑の対象となり，彼を攻撃する数多くの著作が生み出された。だが，こうした一連のツィンマーマン批判が，ツィンマーマンの人格攻撃にとどまらぬ政治的意味合いをもったのは，この著作のある箇所に起因していた。『孤独論』の中に「修道僧的存在と神秘主義に対する啓蒙主義の党派的著作」[36]を見ていたニコライたちを不意打ちにするかのように，ツィンマーマンはここで突然ベルリン啓蒙主義に対し口汚い罵詈雑言を浴びせ始めるのである。彼によればフリードリヒ二世は確かに思想の自由を許可したが，啓蒙主義者たちは王の寛大な措置をよいことに放恣の限りを尽くしたというのである。

> 信仰と道徳の啓蒙者たちは万事を無軌道の極へと追いやった。（…）啓蒙された男たちは精神のあらゆる束縛に抗い，啓蒙された女たちは心のあらゆる束縛に抗った。男たちは妻の眼前で白昼堂々売春婦たちを家に呼び（…）一方その妻たちは間男に精を出した。これは，この種の行為への愛好と欲求のみに発しているのではない。あまねく広がるベルリン啓蒙主義の光に対する喜びと熱狂がそうさせているのだ。

(…)離婚や妻の交換はベルリンでは古代ローマが腐敗の極にあった時代と同じくごく普通のことだ。(…) だが，ポツダムほど啓蒙主義の進展が，おそらくは進歩への希望から，極端なところはない。ここでは理神論の教えがあまねく普及し，啓蒙主義の力がいとも強大となった結果，(…) 過去10年間の内に300人もの人間が自殺したのである[37]。

ツィンマーマンの突然の「転向」は同時代者にとっても後の研究者にとっても理解不能な事態と受けとめられており，多くは悪化の度合いを深めていった彼のヒポコンドリーに原因を見ようとしている。だが，ツィンマーマンの激烈な反啓蒙主義者への変身を考えるに当たっては，彼自身の精神状態に加えて，フリードリヒ二世の死去と共に啓蒙主義と絶対主義の蜜月時代が終焉を迎えた当時のプロイセンにおける思想的状況を考慮に入れる必要がある。次期国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世を巡っては，急進啓蒙主義的秘密結社「啓明結社」と反啓蒙主義的結社「黄金・薔薇十字会」がそれぞれ自らの陣営に迎えようと水面下で激しい駆け引きを展開していたが，これは後者の勝利に終わっていた。「黄金・薔薇十字会」ベルリン支部長 J. Chr. ヴェルナーは1781年，皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムを同結社に入会させて反啓蒙主義的思想教育を施すことに成功した。ヴェルナーは王座の交替を待ってプロイセン大臣に就任すると，「啓蒙主義者たちに対する戦争」を宣言して1788年7月9日には厳しい言論統制を狙った『プロイセン国家における宗教体制に関する勅令』を起草・発布した。これによってベルリン啓蒙主義は一転守勢を強いられることになるわけだが，こうした反啓蒙主義政策の展開を視野に入れるならば，ツィンマーマンがフリードリヒ二世への潜在的批判を込めつつ「国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世がやってきて，ベルリン啓蒙主義者たちに向かって《ここまでだ。これより先は許さない》と言わなければならない」[38]と書くとき，彼の姿勢が時の権力者への追従という点である種の一貫性を持っていることが認められるだろう。同時に，ツィンマーマン関連の論争が『宗教勅令』を巡る激しい議論と重なり合って展開していった事実からも

伺えるように，ツィンマーマンの名はフランス大革命勃発前夜のドイツにおいて反動勢力の象徴としての意味さえ持つようになっていった。

『ベルリン月報』1788年7月号掲載のビースターによる「ベルリンに対する最近の恐るべき非難について」を嚆矢として次々に発表されたツィンマーマン批判のなかでも最も的確かつ痛烈な内容を示したのはアドルフ・フライヘア・クニッゲによるパロディー『艶福家フリードリヒ・ヴィルヘルムおよび，私と彼との対話について。選帝侯国ハノーファーのズボン職人J. C. マイヴェルク作』であろう(39)。激しい上昇志向の末に「フォン」の肩書きを獲得したツィンマーマンにとって，死に至るまで最も苛烈な論敵となったのが，自らの名前から「フォン」を削ることで「自由な人士」を自任したアドルフ・フライヘア・クニッゲであったことは象徴的だが，クニッゲは架空のズボン職人にツィンマーマンの言葉を再現させることで，権力に対する卑屈と肥大した自尊心がないまぜになったツィンマーマンの態度を容赦なく暴き立てた。そしてクニッゲはズボン職人の対話相手としてフリードリヒ二世の代わりにフリードリヒ・ヴィルヘルム二世を登場させ，宗教問題についてこう発言させている。「私がこの問題について話すとなれば，わが枢密顧問官ヴェルナーに同席してもらわんとな。」(40) 1788年の段階ではこの一節に込められた諷刺的意図は誰の目にも明らかだったに違いない。

6

こうした動きに対しツィンマーマンは直ちに『ミラボー伯に対するフリードリヒ大王の弁護』(1788年) を発表し，王座の交替が近いと見たベルリン啓蒙主義者たちがミラボーを道具として用いて新王の「啓蒙」(すなわち思想操作) を試みた，という非難をおこなった(41)。これによってツィンマーマンはフランス革命勃発前後に猖獗を極める陰謀理論の一翼を担うことになった。彼は「真理の排撃を目的とするベルリンとフランスの哲学者たちの結社」による策動を警告し，他方反啓蒙主義政策の主導者ビショフヴェルダーとヴェルナーについては，「神に関わる事柄を擁護し，キ

リスト教の排撃者どもや啓蒙主義の激流に敢然と対抗した」その「純粋で不屈の勇気」に賞賛を贈った(42)。彼はさらに革命勃発後の1790年には『フリードリヒ大王に関する断章』(43)を発表し，もはや彼の強迫観念となった陰謀理論をあらゆる激烈な表現を使って鼓吹した。かつてユダヤ人哲学者モーゼス・メンデルスゾーンに対し崇拝に近い尊敬の念を寄せていた彼がここでは「ベルリンの啓蒙主義シナゴーグ」という偏見と差別意識も露わな表現を用い，啓蒙主義の陰謀家たちは「ベルリンである種の人士の首をはね，啓蒙主義シナゴーグの戸口の前で晒し首にすることも厭わないだろう」とまで書いている(44)。

1788年に始まる一連の反啓蒙主義的著作によって，ツィンマーマンは広く知識人の賞賛と尊敬を集めた「哲学的医師」から，反啓蒙主義的扇動をおこなう「政治的著述家」へと大きく変貌を遂げると共に，かつての人間学的著作によって獲得した名声をことごとく失うことになった。まだ共和主義者を自任していた1766年，ツィンマーマンはニコライ宛の書簡で故郷ベルン州の偏狭な精神風土への不満を鳴らし，ベルンの共和国政府がその実「まったくの貴族制にほかなら」ず，そのため「ただ一人の君主を戴く」プロイセンよりも「299人の君主」を持つベルンの方がはるかに思想の自由に関して劣っていることを訴えていたが，これに続く箇所で彼は，あたかも政治的転向を遂げた後の自らの姿を予示するかのような言葉を述べている。「貴族主義者というものは揃って臆病者であり，したがって猜疑心が強く，したがって自由に物を書くと見なされた者には鵜の目鷹の目で対するのです。」(45) 事実，社会的成功とともに視点を権力者のそれと重ね合わせるようになったツィンマーマンは，ヒポコンドリーに病んだ神経が内面に生み出す幻像を啓蒙主義者という外部の「敵」に投影し，それによって原理的に終わることのない戦いに身を投じた観がある。やがてツィンマーマンは反革命・反啓蒙主義のプロパガンダ雑誌『ウィーン雑報 Wiener Zeitschrift』発行者 L. A. ホフマンと手を組み，同誌にクニッゲを誹謗する一連の記事を寄稿するかたわら，1791年暮れにはホフマンの仲介によりオーストリア皇帝レオポルト二世に書簡を送って，啓蒙主義者の

秘密結社に対抗するため反革命秘密結社の結成を進言するなど(46)，ますますその活動は政治への傾斜を深めていった。レオポルト二世から自分の提案を高く評価されたツィンマーマンだったが，皇帝に政治的影響力を行使しうるという彼の期待は，レオポルト二世の92年3月の急死によって裏切られることになった。ツィンマーマンはこの打撃から立ち直ることが出来ず，一方ヒポコンドリーの悪化とフランス革命軍がドイツ内に進軍するという状況が重なって，「フランス人たちが彼を貴族主義者と見て探し出し暴行を加えると考えて取り乱す」など，迫害妄想が顕著になってゆく。以後死に至るまでのツィンマーマンの姿は悲惨である。「記憶力は弱まり，分別は薄れ，彼の想像力はさまざまな妖怪を生み」だした。やがて彼は「貧窮と飢えで死ぬ」ことを恐れるようになり，自分の行くところすべて「ペストや疫病が蔓延している」との妄想に苦しめられた。「食物や医薬の服用に激しい嫌悪を示し」，身体を触られると「言いようのない痛みを訴え」，痛みに対する恐れから「数ヶ月にわたり髭を剃る」ことを拒絶した。結局彼は「直腸の激痛に三日三晩叫び声を挙げ続け，小水を漏らし，恐ろしい不安に苛まれながら」1795年10月7日死去した(47)。67歳だった。彼の最期を看取ったツィンマーマンの二度目の妻は友人ティソにこう言ったという。「神経が彼を完全に支配してしまうことがなかったなら，あの人は何と素晴らしい人だったことでしょう。」(48)

注

(1) Goethe, Johann Wolfgang : Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. In : Goethes Werke (Münchner Ausgabe), Bd. X, S. 63ff. ゲーテとツィンマーマンの最初の出会いはこれに先立つ同年7月のことだが，そのさいツィンマーマンは温泉保養地バート・ピュルモントで診察に当たったシュタイン夫人のシルエットをゲーテに呈示し，ゲーテとこの婦人との運命的出会いのきっかけを作っていた。

(2) Ischer, Rudolf : Johann Georg Zimmermanns Leben und Werke. Litterarhistorische Studie, Bern 1893, S. 137-149.

(3) 引用は [Mutzenbecher, J. :] Johann Georg von Zimmermann. In : Jördens, Karl Heinrich [Hrsg.] : Lexikon deutscher Dichter und

Prosaisten, 5. Bd, Leipzig 1810, S. 632-658, S. 632による

(4) Langenbacher, Andreas (Hrsg.) : Johann Georg Zimmermann. Mit Skalpell und Federkeil - ein Lesebuch. Bern/ Stuttgart/ Wien 1995, S. 35.

(5) Platner, Ernst: Anthropologie für Aerzte und Weltweise. Erster Theil. Leipzig 1772, S. XIV.

(6) 同上, S. IIIf.

(7) Reiber, Michael: Kulturgeschichtliche Aspekte des Schmerzes. In: Schweizerische Ärztezeitung. Nr. 47(2000), S. 2653.

(8) 「私は18歳までベルンのアカデミーに所属したが，そこで講ぜられた哲学はこの上なく無味乾燥で退屈だった。その結果，最も勤勉で模範的な生徒たちの中から精神薄弱になるもの，せむしになるもの，痴呆になるものが続出した。私はといえば，ありがたいことに何一つ学ばなかった。」Zimmermann, Johann Georg: Von der Erfahrung in der Arzneikunst. Zürich 1763/ 64. II. S. 518.

(9) Zimmermann, Johann Georg: Von der Diät für die Seele. Hrsg. v. Udo Benzenhöfer und Gisela vom Bruch, Hannover 1995, S. 78f. この著作はツィンマーマンの生前未発表だったが，ハノーファーの州立図書館に保存されていた手稿により1995年初めて公刊された。

(10) Zimmermann, J. G.: Das Leben des Herrn von Haller. Zürich 1755

(11) [Mutzenbecher:] Johann Georg von Zimmermann, S. 636.

(12) 「今日大英帝国侍医としてハノーファー在住のツィンマーマン氏がまだブルックにいた頃のこと，あるときツィンマーマン氏とともに窓辺に立ってひとりの軍人とおぼしき人の顔を見やった。近視であるにもかかわらず，見たこともないような骨相のためか，路地に見える顔に突き動かされたかのように，いささかの熟考もせず，何か注目すべきことを言っているという考えもなしに，非常に決定的な判断を下した。ツィンマーマン氏は少なからぬ驚きとともに，私の判断は何に基づくのか，と尋ねた。口をついて出たんです，というのが私の答えだった。これがいわば私の観相学が誕生した瞬間だった。」Lavater, Johann Kaspar: Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe, Bd. I. Leipzig u. Winterthur 1775, S. 20.

(13) Lavater: Physiognomische Fragmente, Bd. III, S. 339

(14) 引用は Maduschka, Leo: Das Problem der Einsamkeit im 18. Jahrhundert. Weimar 1933, S. 82による。

(15) Tissot, Samuel-Auguste: Leben des Ritters von Zimmermann,

Hannover 1797, 引用は Langenbacher : J. G. Zimmermann, S. 489による。

(16) Minor, Jakob : Einleitung zu Zimmermanns „Ueber die Einsamkeit". In : Minor (Hrsg.) : Fabeldichter, Satiriker und Popularphilosophen des 18. Jahrhunderts (Deutsche Natinonal-Litteratur, hist. krit. Ausgabe, hrsg. von Joseph Kurschner, 73. Bd.) Berlin und Stuttgart o. J., S. 335.

(17) E. von Feuchtersleben : Zur Diätetik der Seele, Wien 1842, S. 163, 引用は Maduschka : Das Einsamkeitsproblem, S. 85による。

(18) Tissot : Leben des Ritters von Zimmermann, S. 489.

(19) [Mutzenbecher :] Johann Georg von Zimmermann, S. 635.

(20) 彼が患者として直面したこの手術は，麻酔なしでおこなわれた危険なものであったが，彼は「哲学的剛毅さをもって」これに対し，「じつに男らしく，耐え難い苦痛にもかかわらず執刀に当たった外科医たちと自分の状態について言葉を交わし，彼らを励まし導いた」という。Meister, Leonhard : Helvetiens Beruhmte Manner in Bildnissen von Heinrich Pfenninger, Mahler, nebst kurzen biographischen Nachrichten. 2. Auflage besorgt von J.C. Fasi. Bd. 2. Zürich 1799, S. 314.

(21) 執刀医メッケルは手術の経過を論文として発表した。『ドイツ文献総覧』がこのニュースを掲載したのみならず，閨秀詩人アンナ・ルイーザ・カルシンは自死を選んだカトーの蒙昧ぶりと対照させてツィンマーマンの英雄的態度を讃える詩を作った。

(22) Zimmermann, Jahann Georg : Ueber die Einsamkeit. 1. u. 2. Teil Leipzig 1784, 3. u. 4. Teil Leipzig 1785.

(23) Minor : Einleitung zu Zimmermann, S. 344.

(24) Wagner-Egelhaaf, Martina : Die Melancholie der Literatur. Diskursgeschichte und Textfiguration. Stuttgart u. Weimar 1997, S. 155.

(25) 『孤独論』の構成は以下の通り。第1巻：第1章「導入とこの本の構成」，第2章「社交への衝動」，第3章「孤独への衝動」，第4章「キリスト教会初期および気温の高い地域における孤独への衝動」，第2巻：第5章「孤独のいくつかの有害性」，第6章「孤独が想像力に及ぼす有害性」，第7章「孤独がとりわけ隠遁者や修道僧の情動に及ぼす有害性」第3巻：第8章「孤独の偽使徒に対する弁明」，第9章「孤独の一般的有用性」，第10章「孤独が精神に及ぼす有用性」，第4巻：第11章「孤独が心に及ぼす有用性」，第12章「全体の概観。神秘主義と修道僧一般に関する考察。結語」

(26) Allgemeine deutsche Bibliothek. 61. Bd, 1. St, S. 141-157, S. 144.

(27) 同上, S. 152.
(28) Minor : Einleitung zu Zimmermann, S. 345.
(29) Ischer : Johann Georg Zimmermann, S. 79.
(30) Weiß, Christoph : Nachwort zu : Bahrdt, Carl Friedrich : Mit dem Herrn [von] Zimmermann deutsch gesprochen, hrsg. von Christoph Weiß. St. Ingbert 1994, S. 61.
(31) Zimmermann, Johann Georg : Ueber Friedrich den Grossen und meine Unterredungen mit Ihm kurz vor seinem Tode. Leipzig 1788
(32) 「隠れカトリック・キャンペーン」については拙論Verschwörungstheorien im Spiegel der „Berlinischen Monatsschrift" in den 80er Jahren des 18. Jahrhunderts. In : Fürnkäs, Josef u. a. (Hrsg.) : Zwischenzeiten Zwischenwelten. Festschrift fur Kozo Hirao, Frankfurt a. M. u. a. 2001, S. 387-419を参照のこと。
(33) 1788年4月6日付書簡。引用は Weiß : Nachwort, S. 63による。
(34) [Hippel, Theodor Gottlieb von :] Zimmermann der I. und Friedrich der II. Von Johann Heinrich Friedrich Quitenbaum, Bildschnitzer in Hannover, in ritterlicher Assistenz eines Leipziger Magisters. London, in der Einsamkeit [Berlin] 1790.
(35) Zimmermann : Ueber Friedrich den Grossen, S. 40.
(36) Minor : Einleitung zu Zimmermann, S. 345.
(37) Zimmermann : Ueber Friedrich den Grossen, S. 237ff.
(38) 同上, S. 243
(39) [Knigge, Adolf Freiherr :] Ueber Friedrich den Liebreichen und meine Unterredung mit Ihm von J. C. Meywerk, Churf. Hannöverischen Hosenmacher. Frankfurt und Leipzig 1788.
(40) Knigge : Ueber Friedrich Wilhelm den Liebreichen, S. 19f.
(41) Zimmermann, Johann Georg : Vertheidigung Friedrichs des Grossen gegen den Grafen von Mirabeau. Nebst einigen Anmerkungen über andere Gegenstände. Hannover 1788.
(42) Zimmermann : Vertheidigung Friedrichs des Grossen, S. 48.
(43) Zimmermann, Johann Georg : Fragmente über Friedrich den Grossen zur Geschichte seines Lebens, seiner Regierung, und seines Charakters. 3 Bde, Leipzig 1790.
(44) Zimmermann : Fragmente über Friedrich den Grossen S. 282.
(45) Zimmermann an Nicolai am 6. September 1766. 引用は Haberstaat, Sigrid : Zimmermann und die Berliner Aufklärung : Friedrich Nicolai. In : Schramm, Hans-Peter : Johann Georg Zimmermann,

königlich großbritannischer Leibarzt (1728-1795), Wiesbaden 1998, S. 179-184, hier S. 180による。

(46) Vgl. Ischer : J. G. Zimmermann, 194ff ; Weiß, Christoph : „Royaliste, Antirepublicain, Antijacobin et Antiillumine" Johann Georg Zimmermann und die ‚politische Mordbrennerey in Europa'. In : Von „Obskuranten" und „Eudämonisten". Gegenaufklärerische, konservative und antirevolutionäre Publizisten im späten 18. Jahrhundert. Hg. v. Christoph Weiß in Zusammenarbeit mit Wolfgang Albrecht. St. Ingbert 1997, S. 367-401, S. 381ff.

(47) [Mutzenbecher :] Johann Georg von Zimmermann, S. 641.

(48) Tissot : Leben des Ritters von Zimmermann, 引用は Langenbacher : J. G. Zimmermann, S. 489による。